

## モチーフワークにおけるワークショップ「Throwing in progress」の意義と可能性

### The possibility and the significance of the workshop ‘Throwing in progress’ in Motif-Work

前林明次 笹口数 佐原浩一郎

MAEBAYASHI Akitsugu, SASAGUCHI Kazz, SAHARA Koichiro

#### 概要

2011年9月、IAMAS1年生を対象とした授業「モチーフワーク」において、ワークショップ「Throwing in progress」が開催された。「投げる」という行為は私たちにとって最も根本的な身体動作のひとつであり、長い歴史のなかで様々な意味や解釈と結びつきながら日常生活に深く浸透している。本ワークショップではこの行為に着目し、参加者それぞれが、そこから広がるイメージや言語的連想を空間的にマッピングし、共有しながら書き換えていくことで、個人と集団的な思考プロセスを結びつけながら発展させていく試みがなされた。本稿ではこのワークショップのコンセプトと狙い、そしてその実際を時系列的にドキュメントしながら、どのような想定の下にワークが設定され、教員と学生の間でどのようなやり取りが行われたかを詳述していく。さらに、本ワークショップを振り返りその意義と可能性について述べた後、今回の共同作業のプロセスでありアウトプットでもある「空間的なあらわれ」からどのような可能性が読み取れたのか、第3者的な視点による評論を掲載する。



図1：ワークショップ風景

## 1. はじめに（前林明次）

2011年9月26日、28日、30日の3日間、IAMAS1年生全員を対象とした授業「モチーフワーク」において、現代美術家の笹口数を迎え「Throwing in progress」というワークショップが開催された。笹口は、言語やイメージによる連想の力によって、対象と対象の背後に潜む潜在的な意味や関係性を再構築していくというプロセスを制作の基礎に位置づけている。今回のワークショップでは彼の制作アプローチを、思考を展開し共有するための方法論として捉え、それを「グループワーク」へと応用することで、参加者の発想の仕方や思考プロセスを見直し、他者と共有可能なものにしていく場の構築を試みた。

「グループワーク」と言えば、ひとつの明確な目標に向けて、グループ内部での異なる意見の集約と調整、役割分担と作業効率等が重視されてきたきらいがあり、参加者個々の発想のあり方そのものを問い直したり、「思考し、それを共有し、進めること」自体のポテンシャルを高めていくようなあり方についてはこれまであまり模索されてこなかったのではないだろうか。それに対し、今回のワークショップでは、参加者各々が持つデザイン、アート、エンジニアリングなどの専門性や役割を基礎として共同作業が行われるのではなく、それらのより基層にあると考えられる、発想の仕方や思考のあり方自体を問い直し、その共通性を最大限に広げることによって「専門性」の意味そのものが問い直されていくような「グループワーク」を目指すことになった。

IAMASには毎年、大卒相当から30～40代までの幅広い年齢層の学生が集まり、そのバックグラウンドもデザインからメディアアート、現代美術、エンジニアリングから建築、美学を志すものまで非常に多様である。このように幅広い層から成り立つ少人数の学年編成は全国的に見ても非常に珍しく、これこそがIAMASがもつ重要な特徴と言える。このような学生たちが一堂に会するモチーフワークという授業の場で、何を共通の目標とし、どのような共同作業の形があり得るだろうか？それは教員のもつ「専門性」に早急に引き寄せるために、ある「ひな形」を提示しそのバリエーションづくりを求める、と言うことではないだろう。むしろどのような「専門性」にとっても前提となるはずの、「思考し、それを共有し、進めること」自体の可能性をより広げていくことではないだろうか。教員のもつ専門性を生かしながら、デザイン、アート、エンジニアリング等という枠を超えた、あるいはそれらすべてのベースとなり得る共通の領域を想定し、それを目指して教員、学生個人個人が自らの身体とともに発想し、思考を広げ、共有する場をつくりだしていくことではないだろうか。IAMASにおけるモチーフワークをこのような試みの実践的な機会として捉えてみると、今回のワークショップは重要な意味を持つことになるだろう。そして、この試みが単に一教育機関の授業内での取り組みに限定されない、集散的、社会的な知の形成のあり方に対するひとつの方法論となり得ることを期待するものである。

## 2. ワークショップの狙い、なぜ「投げる」なのか？（笹口 数）

- ・ わたしたちの日常に染み渡るように関わること
- ・ 習慣化され無意識のうちにおこなわれていることに目を向けること
- ・ 身体的な経験をとおして考察をすすめることができること
- ・ われわれの知覚、表現についての再考につながる可能性をもつこと

まず、これらの条件にあてはまる情報に向き合ってみる。個々のアイデアを形にする以前の、身近な情報に触れ、確かめ、思考するプロセスそのものをグループワークの軸として考えた。個と全体が呼応し高め合う創造的思考のプロセスをつくる試みである。

このグループワークの計画にあたり、私自身が継続する身体表現についてのスタディーワークに基づく展開を検討した。それは、特定の身体フォーム（ポーズ）についての画像アーカイブによる考察という、ある特定のイメージに集合的な記憶や意味を結びつける知覚や社会環境の変遷を読み解こうとする試みであるのだが、今回のワークショップでは、その対象として、他者、環境への働きかけを強く、また具体的に読み取ることのできる「投げる（throwing）」フォームを選択した。そしてさらに、より身体的に拡張された事象をも含むうる「投げる（throwing）」行為を対象としたスタディーワークを、具体的なグループワークの方法として設定するに至った。そこには、人類史全体に渡る広い視野を持つことに繋がる可能性が想定されたからである。

猿が猿人へと進化する過程において「前足」を地面から自由である「手」へと変容させた。そして、嗅覚に比して発達した視覚と、樹上の生活に適応した自由な肩関節は、獲得した手による「投げる」行為を実現させる。それより、その手はずっと離れたものへと語りかけ働きかけ続けている。「投げる」行為は距離的に離れた目的に対して、これから起こるであろう近未来を想定しての身体と知覚の運動であるといえるだろう。

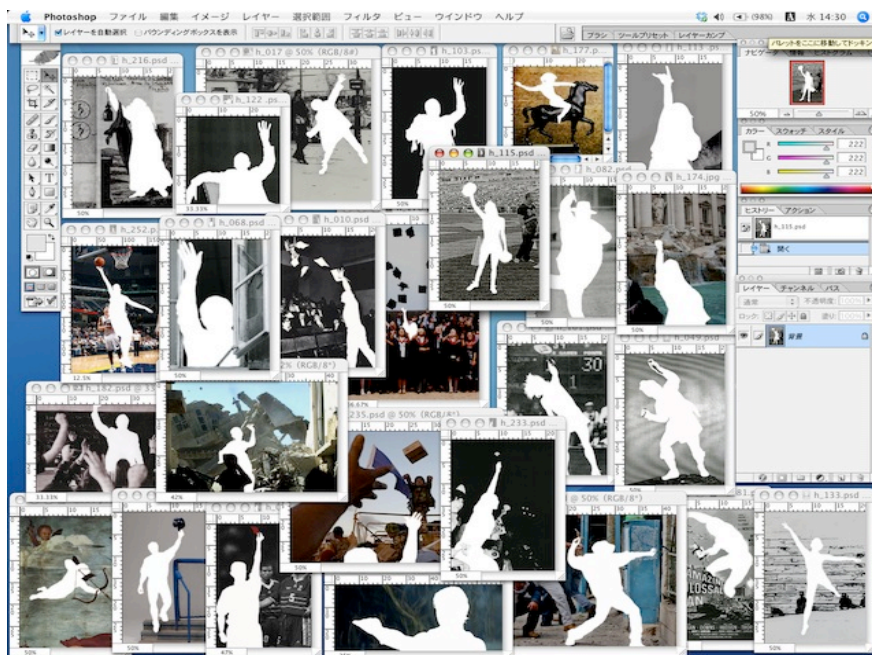


図2：「投げる」フォームのスタディ（笹口）

今回のワークショップでは、実際に自分自身の身体や他の参加者との対話を通して、「投げる」のパースペクティブを構築、共有することを試みた。それはまた、各個人の思考のパースペクティブを確かめ、共有する試みでもあると考えている。この、常に進行形でありうる「投げる」の考察の試みが「Throwing in progress」である。

### 3. ワークショップ「Throwing in progress」の実際（笹口 数+前林明次）

ワークショップ1日目： 2011年9月26日（月）

＜笹口数による自作の紹介＞

笹口の作品及び制作プロセスを紹介する。日常における情報との接し方への興味が、作品制作のプロセスにどのように反映しているのか、また、それを確かめる方法として、どのようにフィジカルなスタディーや制作作業をおこなっているかなどを、実際の事例を通して紹介する。

＜ワークショップスタート宣言＞ 【空っぽのスタジオ空間】

- このグループワークについて、最初に目的となるテーマといったものは与えられないこと、方法を決めて何かをつくるという類いの制作プロセスをもたない、ということ宣言する。
- 固定概念を持たずにワークに入り、作業をするなかでの気づきや閃きを大切に、試行錯誤を行う過程を共有する、ワーク・イン・プログレスの形態のグループワークであることを伝える。
- グループワークのタイトルが「Throwing in progress」であることが伝えられ、「投げる」（throwing）という言葉の唯一共有する「フレーム」として、ワークを進めていくことを宣言する。

ワーク 0 ＜「投げる」という言葉の初期印象のメモ＞ 【大判のザラ紙、太字マーカー】

- 各自目を閉じて「投げる」（throwing）という言葉からイメージを思い浮かべる。壁に貼った大判のザラ紙に、思い浮かんだイメージやことばをそのままに書き記す。一人いくつでもよい。
- 作業後、大判のザラ紙をスタジオ入り口脇に掲示する。

ワーク 1 ＜「投げる」イメージの総覧と解説＞ 【A3版カラープリント約150枚】

- あらかじめ用意された、「投げる」フォームに強く関連すると思われるイメージ、A3版カラープリント約150枚を、スタジオ内の机、床に広く散りばめる。散りばめられたプリントの中を各自歩きさまよいながら、様々な「投げる」のイメージに触れてもらう。
- このワークで共有されるフレームとして「投げる」を設定した理由、意図を説明する。
- A3版カラープリントの主だったイメージについて、メンバーと歩き回りながら鑑賞し、それらのイメージが選ばれた意図等を説明する。

昼休憩

ワーク 2 ＜イメージ画像のピックアップと配置＞ 【A3版カラープリント約150枚、fix-it】

- スタジオ空間全体を使って、メンバー各々がピックアップしたイメージ画像を配置固定（壁貼り）していく。
- スタジオ空間内の長軸方向の一方に猿人の「投げる」を設定し、対面するもう一方の

壁へと進む時間軸を仮設定する。そして、他のどのようなファクターがこの時間軸に呼応するのを探りながら各々がピックアップしたイメージ画像の配置を試行錯誤する。

- 壁に囲まれた床上（壁と壁の間の空間上）に椅子を仮設置しながら、空間全体にイメージ画像の配置を展開する。
- イメージ相互の関連性、近似性を頼りに画像を配置し貼っていくことで、画像のまとまりがあらわれ、そこに意味が生まれはじめる。
- その場で直感的に思い浮かんだことがらも付け加えてよい。失敗の恐れが、情報の共有を妨げてしまう。後で解釈が生まれる可能性もある。
- ネット検索、辞書検索的な捉え方ではなく、個人的な印象を優先させ、配置を行う。他の学生と見解が異なる場合には、その都度話し合いによって調整する。

### ワーク 3 ＜言葉による連想、その記述と配置＞ 【A4版普通紙、太字マーカー】

- 「投」の文字の入った熟語を思いつくままに用紙1枚に1熟語記述する。
- 「throwing」の文字の入った英熟語を思いつくままに用紙1枚に1熟語記述する。
- 上記にとらわれずに、「throwing」「投げる」に強く関連すると思われる言葉を用紙1枚にひとつ記述する。
- これらの文字情報をA3版カラープリントのイメージ画像と共に、スタジオ内に空間的に配置する。合わせてイメージ画像の配置関係を再調整していく。
- 縦軸に「投げる」ことの人類史をもってくる。
- 横軸に関係してくる様々なイメージ、言葉が新たなファクターを想起させる。たとえば「セブンブリッジ」のようなゲームを空間にしかけていく。

### ＜事例紹介＞

前林から「throwing」についての解釈、表現の事例として、情報端末（スマートフォンアプリケーション）による情報送信で、身体的な投げ動作を実空間上の情報送信距離へと反映させる技術開発の事例を紹介する。今回のようなイメージによる空間形成の作業において、イメージ同士の結びつけ方、関係性を捉えるためのモデルケースとして示す。

### ＜画像イメージ、テキストの補強＞

- 休憩時間中に各メンバーが持ち寄った情報を追加、配置する。
- 「投げる」行為の表現のかたちの変遷と社会的環境との関係を、いくつかの評価軸を設定しながら空間的マトリックスのなかで動的に捉え考察してみる。
- 各用紙（情報）の空間配置の基準として読みとれてきた事柄を、皆で拾い出す。縦軸に設定された「投げる」の人類史としての時間軸に対する、横軸方向のファクターを以下のように設定する。

左手側壁：「精度」・「機能」・「効率」・「直線」・「射」

右手側壁：「放出」・「意味」・「拡散」・「感情」・「放」



<1日目終了、解散>



図3：ワークショップ1日目作業風景

ワークショップ2日目：2011年9月28日（水）

<画像イメージ、テキストの補強>

各メンバーが新たに持ち寄った情報を追加配置していく。

ワーク 4 <身体を使って「投げる」> 【芝生グラウンド】

- 芝の広場に出て青空のもと、ものを投げ、確かめ、考えてみる。
- いろんなものを投げてみる。（ボール、グラブ、鍋、やかん、ざる、ゴム紐、座布団、お手玉、バケツ、皿、ボトル、帽子等）
- 利き腕の逆腕で投げてみる。
- 後ろ向きに投げてみる。
- 目をつぶって投げてみる。
- 投げたことのない物を投げてみる。
- そしてまた普通に投げてみる。
- 考えられる方法で、わけのわからない方法で、とにかく投げてみる。
- スタジオ空間に戻り、空間配置された情報群を見ながら、フィジカルに投げた試行の経験を言葉にして確かめてみる。
- 実際に「投げる」のがつまらなければ、1日目の作業を継続したり、そこから自然な展開に任せた作業をする。

昼休憩

<最終提出物としてのレポートの形式の告知>

空間内での個人的興味や視点を明確に定位させ、言語化するための課題として、最終的にレポートの提出が求められることと、そのフォーマットについて説明する。

### ワーク 5 ＜情報観察から空間の意味的な把握へ＞ 【マスキングテープ、ビニル紐等】

- 空間内の情報の分布をより大きく捉え、情報のグループ化、整理などにより、より大きな関係のかたちを探る。
- 離れた相互の情報（イメージ、テキスト）をテープで結び合わせる、グループ化の範囲をテープで囲い示すなど、積極的に空間に関わりながら様々な気づきの検証、議論をすすめる。

### ワーク 6 ＜「思考の核」の抽出＞

- 各自の興味、発見、着想、思考の鍵等、各々の思考の「核」にあたる事柄や関係のあり方を突き止める。
- 活発な対話やグループでの討議、近接した俯瞰する動的な観察、情報配置の調整の継続、オブジェクトの持ち込みなど、自由な取組み方で各自の思索を深め、言語化を進めていく。
- 筐口と個別に話す時間を持ち、各々の考えの「核」となるものを対話によって確かめる。

### ＜2日目終了、解散＞



図4：ワークショップ2日目作業風景

### ワークショップ3日目：2011年9月30日（金）

### ワーク 7 ＜グループディスカッション＞

- このグループワークの最後に予定されているグループディスカッションのあり方について話し合い、参加者各自の「思考」の受けとり方、そしてそれを他者に向けて投げ返す方法を考える。
- 午後の発表の形式を想定し、一人一人が意見を述べ、コメントや質問をもらい答えるという形でディスカッションをおこなう。
- 各自、その内容を受けて昼休憩の時間に午後の発表の準備にあたる。

## 昼休憩

### <最終発表、公開プレゼンテーション>

- 学籍番号からランダムな順番での指名により、最終発表をおこなう。
- 各自のレポートに関わる情報やその関係のかたちを空間内で示し、解説しながら発表をおこなう。積極的に意見、質問・回答を交わす。
- 発表後、各自のアイデアの核をかたちづくるイメージの関係性が結ばれた位置に、A4版にまとめたレポートを配置し発表を終了とする。
- 空間内の気づきの箇所に、定形サイズの用紙でコメントする。一人何ヶ所でも良い。必要であれば空間内の数カ所を関係づける。任意の方法でよい。

### <発表終了後展示>

学内にいた2年生、研究生やスタッフ、教務職員がワークショップの成果としての空間を視察に訪れ、自然発生的に学生との間で質疑応答や議論がなされた。

### <終了の宣言>

参加者全員がバナナを1本ずつ食べ、その後その皮を一斉に投げ、記念撮影を行った。

### <3日目終了、解散>



図5：ワークショップ3日目作業風景



#### 4. 「Throwing in progress」の企図とその可能性について（笹口 数）

スタジオに現れた情報空間の中に立ってみる。

人類史としての「投げる」変遷の世界を見渡す。

「投げる」という概念の可能性の振幅を見る。

起源から今にまで生き続けていることがらを知り、

共有し、この先の「投げる」についての構想をする。

遠くのものに働きかける意識に敏感になる。

社会システムの成り立ちをイメージする。

この先に起こることについて思考する。

その方法を互いに確かめ、その可能性を共有するために。

投げキス／始球式／ロケット／背負い投げ／弓／新聞配達／伝書鳩／花火／投げ網／Launch／灯台／郵便／大砲／キューピット／投げ入れ／飛脚／鉄道／気球／円盤投げ／投げ銭／e-mail／ブーケトス／パラボラアンテナ／塩投げ／靴投げ／水切り／ラグビートス／ベースボールカード／火炎瓶／3Dプリンタ／種蒔き／投石／パイ投げ／紙テープ／飛行機／座布団投げ／投げ輪／援助物資／帽子投げ／ボーリング／ダーツ／槍投げ／スローイングナイフ／投げ銭／カーリング／dropbox／手投げ弾／投扇興／トランスポートーション／飛行船／救命浮き輪／演説台・・・・・・・・

投擲／完投／ブログ／投入／投獄／投票／投稿／怒投／投技／匙を投げる／投げ出す／投下／投資／投機／投影図／free throw／遠投／投光／投身／投書／意気投合／表現する／throw-up／投げ食い／投げ売り／over-throw／投降／投薬／快投／throw away／投げやり／目標／投げ捨て／throw forward／throw down／力投／成果／不法投棄／感情／投函／output／投手／ベクトル／希望／投与／暴投／投宿／投射・・・・・・・・

「投げる（throwing）」から連想されるイメージや言葉で空間を埋め尽くしてみよう、と考えた。この情報を配置し空間化する作業は、イメージや言葉相互の関係性を見つける試みである。より多くの情報をつき合わせ、その関係性を確かめてみるなかで、象徴的であると感じる情報や特徴的と思える関係性との出会いが生まれ、それらが相互に関連し合い、より大きな系を形成していく。こうした多様な関係性のなかに様々な背景を読み取っていく作業のなかで、思考の連鎖をひきおこす「記憶」、「制度」というものが、また、創造性を阻むものとしての「制度」、「記憶」というものが意識され、「記憶」と「制度」が互いに相互作用しているのかを確かめることになる。マスメディアにおいて情報が「～である」と断定され他の情報や事件と確実に結びつけられる様に対し、日常の我々を取り囲む情報の粒子は互いに「～かも知れない」という可能性の磁力で軽く反発し合ってフロートしている。試しにどこで磁極を変換してみればいいだろう？結びつけたもので直ぐに決めずに、情報どうしの関係を安易に固定せずに、情報のもつポテンシャルを保持し続けるにはどうしたらいいだろう？

空間（情報群）のなかで裸足になる感覚で、身体性、空間性を体感、意識しながら、その行為に関わるひとりの当事者として、「throwing」を通した社会、世界、歴史の考察を行った。論じる当事者としての「自身」を基礎に置いた（専門性に縛られない）発言と応答がそこにはある。そして、知らず知らずのうちに引きずられている既成概念やイメージを一旦保留し、荒っぽくも独自性の強いことばを引き出してみる。投げるという行為において、人が複雑な身体の

各部の運動をコントロールし、束ね、ひとつの流れる運動を起こすように、時空間的に広がる情報の関係を一筋の言葉の連なりに変換、編成し他者に投げかける。それは、受けとり、また投げる行為そのものであるだろう。

このグループワークにおいての各自のワークは、ここでは始める前から一人ひとりのなかでは関連する様々な経験としてすでに行われていたことでもある。そして、いったんグループワークの終了とともに会場での作業は終わるのだが、このワークは再びエンドレスに続いていくだろう。始まりに伝えられてはいないワークのテーマとは、各自が作業をするなかで気づき、閃きのなかで見つけ、また確かめていくことそのものである。グループワークとして企図したテーマをひとつ挙げるとすれば、創造の現場において個人が行う試行（試行錯誤）の方法の再確認、強化ということであろう。今回のグループワークは、各人が無意識のうちに普段行う試行錯誤の過程を、ひとつの大きなスペースでひとつのワークとして共有する試みとなったと言いうことができるだろう。他者のアプローチや視点、気づきのかたちや、作業全体の大きな流れそのものを、自らに照らし合わせ、より専門性の高い探求の作業に反映させてほしいと願う。

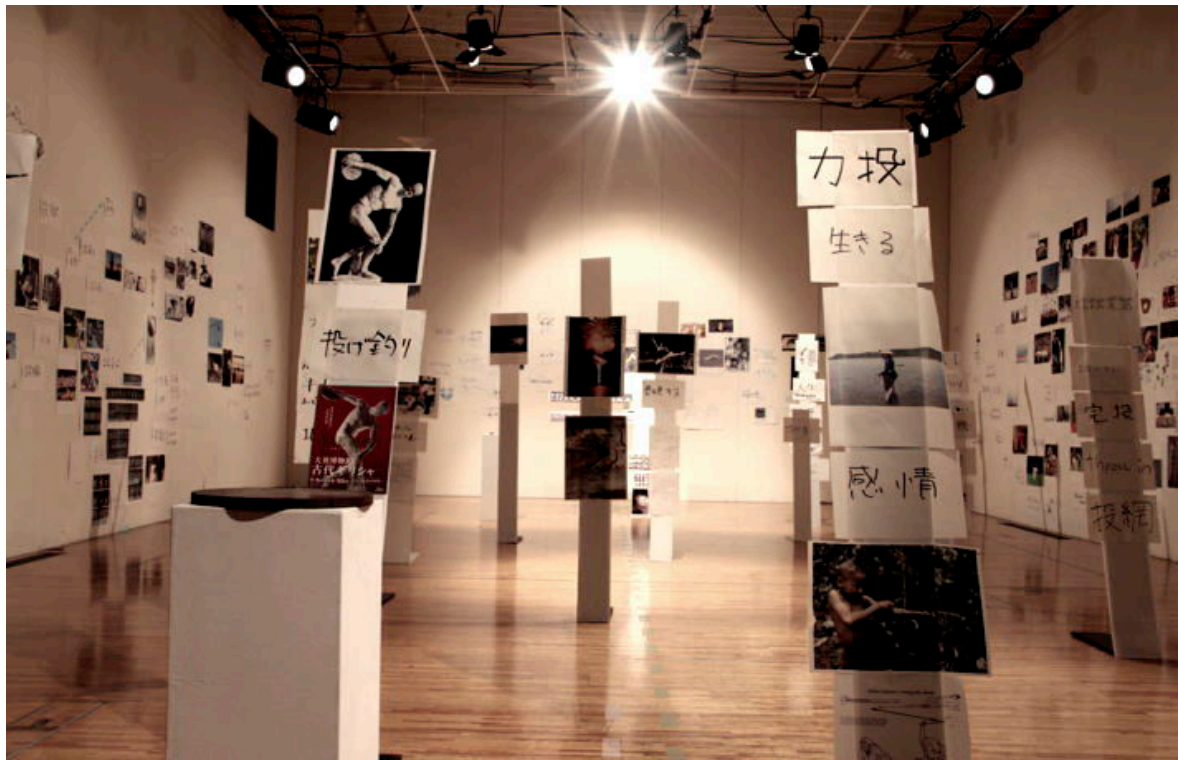


図6: スペース全景（3日目作業終了時）

## 5. 評論：「Throwing in progress」によってあらわれた「空間」とは何か？（佐原浩一郎）

点から線へ：新たに関係し始めるイメージ

その空間は紙に満たされている。多くはA4の白色上質紙に文字が書かれていたり写真が印刷されたりしたもので、それらはすべて壁あるいは立てられた板のいずれかに貼り付けられている。そこは不動の、極めて静的な空間である。紙に書かれた文字、そして印刷されている種々のイメージのほとんどは、イメージと意味が直接的に対応するような慣習的規則としての記号である。人は三方が壁に囲まれその中に幾つもの板が立てられているこの空間を自由に出入りすることが可能とされており、それらの立てられた板の間を縫いながら歩き回ることもまた可能となっている。人がいなくなれば、はじめからそうであったように、そこにある全てのイメージは自らの定位置において佇み、待機する。この極めて静的な空間は、単に動かない空間であるわけではないことは既に察せられている。この空間は木の葉の落下を待つ水面のごとき場であり、水面下、つまりその潜在的レベルの諸力の場合へと内在している。

すべてのイメージは「投げる」という語にまつわるものであり、その中でも類縁関係が見出される諸イメージについては各々に近接して配置されている。イメージの連続性および近接性は、類縁関係や連想関係、あるいは対立関係などの、諸々の関係によって付与されている。ひとつの例としては、強い類縁関係を持つイメージの一群があり、その一群と多少の類縁性を有するような諸イメージが隣接して置かれるという場合が挙げられる。そして全体は、関係性においてひとつなぎとなるような、「投げる」という語にまつわる諸イメージの関係性についての錯綜体とでも言うべきものとなっている。ここにある全イメージは「投げる」という語の一義性において関係を取り持つことが可能とされており、諸イメージが自らの定位置において待機するのみの場として指し示すことはもはや不可能である。この空間は、至極動的な空間である。つまりこの空間は、諸イメージの間に関係としての線を無数に走らせることによって自らを動的なものとしている。

ただしここが諸力の潜在する諸イメージの場であるとするには、これまでの認識では決して十分ではないように思われる。つまり、諸イメージの固定性をどのように把握すべきか。ひとつのイメージはそれ自体では点的なものにとどまっており、それは感覚され、ひとつのサインとなることがなければ、イメージの間で関係を結ぶような線の経由地点となることができない。あるイメージがサインとして感覚されうるものとなり他のイメージと関係する際に生じる線は、点なしには考えることができない。それはいわば「点に従属する線」である。点とは固定性の、そして知覚されうるものの条件であり、そこに点を見出すことを可能とする構造に包摂されるものとしてのみ把握されうる。点を認識することによって可能となったひとつの思考は、結果として線を生み出すことになるだろう。しかし関係性としての線はこのとき既に点を、つまり自らを結果的なものとしていたものを必要としなくなっている。関係性はイメージからの離脱を開始しており、点に従属することなしに独立して実在するものとなっている。関係性の独立は、イメージをサインとして感覚することを可能としていた次元とは異なる次元において起きているのである。面において線があくまでも観念的な存在であるように、関係性の次元においてイメージは一切の実在性を持たない。それはただ結び、通過される観念的な点としてそこに設定されるにとどまる。

実のところ、点、つまりイメージは唯一の動かぬものではない。表象としてのイメージをそこに見出すことを可能としている構造についても同様のことが言える。イメージは構造によってそこに自らを与えられている。イメージから離脱し、独立的なものとなった関係性としての

線が、自らの両端となっていたようなイメージを再び見出そうとすると、それらがかつてのままに認めるのは不可能である。なぜならば関係性とは既にイメージの次元ではなく、事実上そうしたイメージとは直接的な交流を持つことはできないからである。ではいかにして、関係性はかつてのイメージと再び関係することができるのだろうか。

おそらく関係性がかつてのイメージと再び関係するのは不可能である。線としての関係性は、「再び」関係するのではなく、「新たに」関係することとなるだろう。関係性が関係するのは、かつてのイメージが位置していたその点に現れる新たなイメージである。このイメージを立ち上がらせるのは、かつての構造がもはやかつての状態の保持を不可能とし、新たなものとして存在することとなる構造である。構造は常に開かれており、可塑的なものであるだけではなく、不安定なものである。関係性はそうした構造に介入するのだ。表象そのものから離脱した関係性は、次に「表象を異なる水準で支えているもの」のほうにより接近するようになるだろう。それはつまり構造、それも可塑的で不安定な開かれた構造であり、関係性はそうした体系へと働きかけることによって、同一のイメージへの回帰を不可能とするのである。この空間はあたかも砂漠やステップのようであり、遊牧民によって通過されてゆく諸地点が、その姿や他との関係性を変化させ再び遊牧民を待機するような、根源的なある動性を帯びている。

#### 身体の介入と共鳴、呼び起こされる記憶の溶液

ワークショップの中では、実際にものを投げる機会が設けられている。様々なもの、普段投げることもないようなものも含めて、それらを手に持って投げしてみる。投げられたものと、それによって放物線が描かれる空間、そしてそれが到達する地点、それらはすべて、ものを投げた当の身体と一体となって全体を成している。このようなひとつの全体は、さらにそれ以前やそれ以後と連続しながら形成される大きな流れの中にあり、投げるという行為はそうした大きな流れの中に断絶なく含まれている。

この機会において確認されるような、投げることによる身体的な感覚は、一方では現在の空間において得られる諸知覚の総合として認められるものであり、他方では経験的な身体が想起させる記憶との再会として認められるものである。投げるというその動作によって、現在だけではなく、当の身体においての投げることにまつわる記憶としての過去が引き出される。さらに言うならば、それら諸々の過去とは、具体的な情報としての記憶ではなく、既に潜在化し、投げる行為を包み込んでいる全体を満たすものとなっている。それらの過去は、それぞれが個別の具体的な場面であるのではなく、投げるという一連の全体の様々な瞬間において呼び出される、濃度としての分子状の記憶である。そうした流れの中に記憶が溶け出しているのであれば、わたしたちは投げるという行為のどこかで呆然としてしまうに違いない。記憶の濃度が無となったとき、もはやそこに過去を見出すことができないとき、現在地は見知らぬ場へと変貌する。現在の知覚と現在の行為は、呼び出された記憶の溶液と結びつけられ、その濃度を感覚することによってのみ、そこへ未来を迎え入れることが可能となるだろう。このような総合を作り出しているのが身体である。身体こそが、事物を時間的なものにし、投げるという点的な行為を、世界の流れの中に置きなおすのである。

紙に満たされた諸イメージの空間は、投げるという行為の躍動醒めやらぬ身体の介入を許すことによって途端に色めき立ち始める。それぞれのイメージは移動を開始し、実際に空間的な座標を変化させてゆく。座標を変えないイメージはそれとして、移動する諸々のイメージとの関係性の変化に直面しており、そればかりでなく、身体が空間内にとどまっている限り、身体そのものに残存している投げるという行為の余韻に対する共鳴の可能性をつねに保持してい



る。ものを投げる身体的な感覚、そしてその際に呼び起こされた、投げることにまつわる分子状の過去。身体が紙によるイメージの空間内を横切っていくとき、手を使ってものを投げるという身体的体験が随時その空間へと参照され、そこにある諸イメージと関係し、座標は変化してゆくだろう。紙に印刷されたイメージは、人間の手によって粘着テープを剥がされ、新たに位置すべき地点へと貼り直されることによって、自らの降り立つ場を確定しているのではない。身体との関係において自らを変質させるそれぞれのイメージは、その都度他のイメージとの関係を結び直しながら、わたしたちの認識に先立って自らの位置の移行を開始しているのだが、先に述べたような人間の作業とは、それらのイメージの奔放な先行に遅れをとりながら為されるような、物質的な水準における追従にすぎない。

そこに身体を擁する空間において、関係の一方の末端がイメージであるならば、もう一方の末端は身体である。身体は空間内を歩行し、移動しているが、それがイメージに対して取り持っている関係性の変化によって、身体それ自体が変化を余儀なくされ、新たな関係性を帯びるその関係の末端となった身体は、先程までの身体とは異なるものとならざるを得ない。つまり、本質的に変化しているのはイメージと身体の関係性、イメージとイメージの関係性、あるいはイメージ間関係性と身体との関係性であり、すべての潜在的な変化である。そうした変化の両端で、イメージには新たな位置が与えられ、身体には臨時的な同一性が与えられる。実際にものを投げてみるということ、そしてそのようにものを投げた身体が、短期記憶としての体験を未だ色濃く残しているということによって、空間は以上のような作用に見舞われる。そうした身体に足を踏み入れられたイメージの空間は活性化され、関係性を構築してゆく速度を高めてゆく。身体と空間はより密に組み合わせられ、相互に反応し、両者はもはや見分けがつかないほどに纏れ合っており、あたかもそれらは視覚的に確認可能なものではなく、両者のあいだに実在する見えない関係性の生成へと接近していくかのようである。

#### 「投げることの宇宙」= Throwing space の出現

投げるという行為は、或るひとつの「分割」、あるいは或るひとつの「移動」である。まず前者においてそれは、自らにおいて他が生じるということの意味している。あるいは自らが属する任意の地点を差異化、分割し、一方をサテライトとして切り離すということ。投げる主体と同一の地点にある或るものが、投げる主体によって差異化される。一が二となり、二のうちの一がその地点とは異なる地点へと移動させられる。このような側面は、投げることにおける物質的な形式となるだろう。続いて後者における投げるという行為は、投げる主体とは異なる地点に、主体が自らの意識を移動させるということの意味している。そうした移動は一般的に、思いを届ける、気持ちを託すというようなキャッチコピーとして指し示されているものである。実際のところ、意識の移動はそのような一般性において固定され、表面化しているよりもはるかに非物質的、非部分的なものである。つまり、こうしたことは総じて、投げることにおける精神的形式となっている。

これら二つの形式は、それぞれが投げることにおけるひとつの相である。投げることにおいて、その精神的形式が含まれず、物質的形式のみにおいて成立するということは権利上不可能であり、精神的形式のみにおける成立もまた同様に不可能である。両者は補いあっているというよりは、むしろそれぞれ無関係に推移している。投げるという行為は、ふたつの相のそれぞれの或る状態、すなわち物質的な相における分割と、精神的な相における移動というそれぞれの互いに無関係であるような状態の、その間隙に対して与えられた概念である。身体動作としての、腕を使ってものを投げるという行為の成立は、人類が誕生する以前の、当時自らの手の

自由の可能性を拡げつつあった霊長類に遡る。しかし現在のわたしたちがひとたび「投げる」と言うとき、無自覚的にその起源として依拠しているのは、初期の霊長類における動作成立の地点ではない。わたしたちがそのように言うときにはすでに、投げる動作には「投げる」という言葉が与えられている。換言するならば、わたしたちが言語を使用するとき、世界は或る仕方ですべて人工的な言語体系へと変換されている。つまり、わたしたちが「投げる」と言うとき、そこで指し示されているのは投げる動作ではなく、投げるという言語的内容、あるいは概念、つまりその物質的形式としての分割と精神的形態としての移動との間に入り込み、それらと関係付け、統合している「投げるということ」そのものである。そのとき、その起源として無自覚的に依拠されているのは、先程述べたような、投げる動作の成立地点ではなく、「投げる」という言語記号の成立地点であるだろう。

「投げる」という言語記号が、腕を使つてものを投げるという動作との間に極めて強固な因果関係を有していることは想像に難くないが、いずれにせよ成立を見たひとつの言葉は、世界の様々な間隙に入り込みながら、放射状に、急速にその範囲を拡大し、他の様々な言葉と結びつきながら、それらの総体を膨張させてゆく。今回のワークショップでは、紙に印刷されたイメージおよび言葉が構成するそれらの総体によって、ひとつの空間が満たされた。「投げる」という言語記号の総体が未だ膨張を続けているように、当該の空間においても、そのポテンシャルは絶えず変化している。

言語は、腕を使つてものを投げるという動作に対して「投げる」という言語記号を与えるということに、すなわち腕を使つてものを投げるという動作の成立に言語が到達するということにとどまらず、動作の成立から言語の成立までの間、あるいは動作の成立以前、そして言語の成立から現在に到るまでの間、さらには現在からその先にまで浸透していくだろう。例えば「投げ出す」という語において意味される行為は、腕を使つて投げる動作の成立に先立って存在していただろうし、「投獄」や「投手」などの語は、「投げる」という言語記号の成立以後、制度や技術の創出に伴って生じた新たな状況に対して充当されたものである。言語記号はこうして、ひとつの方向性を持った時間性に対して、放射状の多方向的な時間性を帯びながら、常に新たな現在を感知し、すべての過去へと広がっていく。それは絶えず膨張を続けるひとつの宇宙に例えることができるかもしれない。紙に満たされたあの空間は、言わば縮小されたひとつの宇宙であり、それは日本庭園が縮景化された宇宙であるという場合と同様の、ひとつのモデルとしての空間である。それは「投げることにおける空間」であると同時に、「投げることにおける宇宙」、すなわち Throwing space である。

身体強度一見過ごされたものの回復のために

「投げる」という言語記号は、それ自体が実際にはひとつの関係性である。無関係な「分割」と「移動」とを関係づける人間の仕業が、その関係性に対して「投げる」という言葉を与えることによって、線的な関係性を点として把握することを可能としたのである。その空間内に配された諸々の言語そして諸々のイメージは、点的なものとして見出された、線的な関係性である。そのような言語、イメージたちが、それらに満たされた空間の中で絶えざる変化にさらされているということは前述した通りである。

そして、本来は関係性である静的なひとつの言語、静的なひとつのイメージを、変化する構造へと置き直すのが、すなわち世界の流れの中へと再び接続し直すのが身体である。つまり、投げるという行為はそれ自体として独立しているのではなく、それ以前とそれ以後とに分割することさえできないような全体の内部に、それらと混合し、一体となって含まれている。つま

り、ひとつの投げるという行為は、その行為の外部に対して開かれており、常にその外部からの影響下に置かれている。投げるという行為、それは単独で自足しているのではなく、包み込まれている。あるいはそうした行為は、先行するものと、すでに過ぎ去ったものとの間に存在する。先行するものが流入し、過ぎ去ったものが逆流するような混濁の場、つまり今起こりつつある変化のうちにそのような投げるという行為が存在するのである。

一方で、わたしたちはしばしば、自らの行為を見過ごしてしまう。参加者は実際にものを投げた。青空の下、草上で、投げることによってその身体的な感覚を最大限に捉えた。そうした身体は、空間にモチベーションをもたらし、諸々のイメージを振動させることとなるだろう。投げる行為が身体的な感覚に焦点を絞り、それが空間へと及んでゆくことによって、当の空間はなまの、浮遊した、短期的な、あるいは現在の場へと限りなく接近してゆく。しかしそのとき、投げるという行為はどのような外部に包まれているのだろうか。あるいは、どのような先行と過ぎ去りの間にあるのだろうか。

投網漁の漁師が投網を投げるのは、漁の準備を整え、船に乗り込み、投網漁で魚を捕り、その魚を食べるなり売るなりするという一連の移行の中に、投げるという行為とともに漁師の身体が包摂されているからである。投網を投げるという行為は単独で意味を持っているのではなく、複数の伸縮する意味の混合において成立している。そのような全体は、その全体のなかに順序付けられているそれぞれの行為が、それぞれ個別のものとしてはほとんど見えなくなってしまうほどに、全体としてのひとつとなっている。

ワークショップにおける投げる行為、投げるために投げるという行為は、辛うじて事前と事後の関係性の間に位置していると言うことができる。しかしそれは投網漁のように、変化する全体の中に混合した状態で存在しているとは言い難く、むしろ他から独立し、それ自体において意味を有しているように見える。それは、行為がその行為自体に向けられているという、明らかに特殊な状況である。しかし実際には、その先行と過ぎ去りは失われたわけではなく、希薄化しているというわけですらない。それらは同様の強度を保ちながらそこに存在している。つまり、先行と過ぎ去りは、その行為自体の内に存在しており、そこにはひとつの断絶であるような瞬間的な全体が形成されている。ひとつの瞬間のなかに、事前性と事後性が籠っているのである。そこでは予め投げる身体が構想され、投げる行為が起こると同時に、その事後性としての身体的な感覚が確認される。あたかもそれは意志と行為との関係性の確認であるかのようなのである。投げる行為はこのとき、投げる行為を現働化させている身体を目的とし、行為がもたらす身体的な感覚を結果としているひとつの瞬間、それぞれが分け隔てられることのないひとつの瞬間、あるいはひとつの質的状況としてのみ見出されうるだろう。実在の瞬間、つまり投げる動作の向こう側には、そのような事前性と事後性に経巡られた観念的な瞬間が待機しているのである。

こうして身体は投げるということのすべてとなる。このような特殊な状況に見舞われることで、あるいはこのような身体の強度を発見することによって新たに眼が向けられるようになるのは、投げるという行為が、単に「投げる」ということを意味するような行為、つまり一般的な流通を可能とするような意味作用であるということではなく、人間的な共通理解とはその起源としてそもそも関わりのない世界に、わたしたちが内在しているということである。

わたしたちは世界から切り離され、人間的なコミュニケーション、因果律と量的善悪、イメージの現在地、ルサンチマン…そうしたもののうち、つまり世界の外部に幽閉されているというわけではなく、身体によって、不断に世界と結びつけられている。人間的な思考はますます場を区切り、行為や意見を細分化しそれらを情報として提出し、世界を諸々の断片としてしま

う。そうした分割を維持しようとする力、人間的な思考を強化してゆく力、すなわち或る権力が、その下に人間を管理している。分割の維持に最も効率的で最も実用的なもの、権力にとって不可欠なものとなっているのが、数値およびイメージである。権力は、常に現在を「時価」として数値化し、いたるところで執拗に現在的イメージを反復するのである。こうして権力による管理があらゆる時間とあらゆる空間を満たしていく。このような管理の形態に包囲されている現代の人間は、その中でコミュニケーションをとらなければならない。ある意味で権力は、人々が関係するよう強制するのであり、人間は他者との間の関係を失ってしまったわけではない。しかし権力によって演出された、他者との間のそのような関係はますます抽象の度合いを高め、より直接的には、人間と世界との間の関係が今にも閉ざされようとしている。それでもなお人間の時空間が存続しうるのは、身体によって、常に人間が世界に関係付けられているからであり、人間が世界との関係を閉ざそうとしているというときに意図されているのは、わたしたちが常に世界と関係しているということについての思考を停止するというところに他ならない。投げるために投げるという行為、先行と過ぎ去りをひとつの瞬間のなかで行為として表現する身体は、閉ざされつつある世界を別の権力によって強引に開くのではなく、いくつかの穴を、そこから世界が流入するようないくつかの通路を作り出すだろう。

行為を、身体に発し、身体に帰すものとして捉えること。そこに強度的身体を見出すこと。そこから例えば身体の可能性を信頼することや、身体的作用を見届けるということを可能とするような機会が与えられるかもしれない。それによってわたしたちは、その関係が断ち切れようとしていた世界へと、いくつかのバイパスをつなぐことができるようになるだろう。このワークショップが、はじめにスタジオ空間を「空っぽ」であるとし、目的となるテーマや決められた方法は存在しないということを宣言しているのも同様に、本来的に世界は閉ざされているものではなく、常に既にそして今わたしたちが全面的に開かれた世界へと投げ込まれたものとして存在しているという前提の確認であると言える。ワークショップにおけるこのようなインタラクションによって、わたしたちは、世界がわたしたちに届いているということ、あるいは常にわたしたちの傍らに世界が存在しているということを意識する。イメージはただ見えるだけのものではなく、言葉は空虚に意味を指示するだけのものではない。いつしか参加者は紙に満たされたその空間を、動的なものとして、つまりひとつの生きた世界として認識している。